

59 《ラウラ》の謎 ジョルジョーネ

なぜこの作品には署名があるのか

2023

真鍋友範



《ラウラ》1506 ジョルジョーネ 41×33.5
ウィーン美術史美術館

1 描かれた女性は誰か

描かれた人物について、参考になる由来が明らかな図版がある。

ジョルジョーネの弟子ティツィアーノが描いたヴェネツィアの高級娼婦ヴェロニカ「フランコの肖像画」だ。

娼婦の肖像画であることを明示する特徴は、片方の胸を晒している点だ。つまり職業を示す看板のようなものだ。

注文主は、当時の高級娼婦であり、つまり経済的に充分潤っていた為、この絵画をティツィアーノに直接注文したのか、或いは馴染み客であった商人か貴族からの肖像画の注文があり、ティツィアーノが描いたものであったのだろう。

この作品から類推できるように、「ラウラ」もまた、ジョルジョーネが描いた当時のヴェネツィアに実在した同じく高級娼婦であったと考えられる。



《ヴェロニカ・フランコの肖像》1575年頃 ティツィアーノ

* 実在したヴェネチアの高級娼婦（1546-91）

2 逆に、なぜジョルジョーネは自作に署名していないのか

本作の場合、ジョルジョーネの署名が残されている。では、他のジョルジョーネ作品に署名が無いのは何故なのだろうか。

当時なら、通常ジョルジョーネへの注文主は、おそらく教会、裕福な商人や貴族階級の人たちだ。

当然、財産目録を製作していたはずだ。購入先、題名、作品サイズ、或いは、購入金額までも記録していたはずだ。従って絵画にサインがなくても、直接の購入した個人が所蔵する限り、特に困ることはなかったはずだ。注文した側も転売を意識していなかったのだ。おそらくは、ジョルジョーネへの注文は、作品サイズが小さいことから、個人注文が大多数であったと考えられる。

ジョルジョーネの側として、注文された作品に自分のサインを残さなかったのは、何故だろう。

盛期ルネサンスの画家たちであれば、注文を受けた大作の隅に、さりげなく自分の姿を描いていたりする。

ジョルジョーネへの注文作品は小品が多く、その為、登場人物も限られ、描くと予知は無いことと、ジョルジョーネ自身が、あまり自己顕示欲が無い謙虚な人物であったのが理由かもしれない。

3 署名の目的とは

それにも関わらず、この肖像画《ラウラ》には、署名が残されている。

その理由として考えられることは、描かれた娼婦が【直接ジョルジョーネに対し、サイン記入を希望した】と考えられるのだ。

何故なら、貴族や裕福な商人なら、財産目録で、ジョルジョーネ作品の所有を証明できるが、通常財産目録など作らない高級娼婦にとって、ジョルジョーネのサインは自分の作品所有権を証明する必須要素であったのだ。

確固たる証拠は無いが、この辺りが《ラウラ》にジョルジョーネのサインが残された由来では無いだろうか。